

会の川概要

羽生市大字上川俣を起点、加須市大字川口を終点とする中川水系の普通河川である。利根川の旧河道であり起点の上川俣において、かつて利根川の幹川は南に流れ、派川が東に流れていたとされている。しかし、利根川主流が会の川に流れ込んでいた場合文禄3年の締切りは非常に困難であり、技術的に不可能に近かったのではないかと想像されることから利根川の主流は現利根川筋を流下し、会の川にはそれほど流水がなかったと考える説もある。さらに現利根川と会の川に挟まれる羽生領内を、上川俣を起点に島川や葛西用水など数本の水路が走り、また対岸には谷田川に向う流路跡があること等から、かつてはこの川俣付近で利根川が数派に分れていたものと思われる。

会の川は用悪水路兼用となっており、8カ所の取水堰が設けられている。終点の川口にて葛西用水路に合流したうえで最終的に中川に排水される。同地に所在する水利施設は、会の川流路より中川への排水機能と同時に、会の川流路より葛西用水路本流への加水機能も持つ。また葛西用水路本流より中川への排水も可能である。また、会の川には20数基の石橋がかかっており、これらの橋梁群は土木学会によつての本の近代土木遺産に選定されている。

かつての利根川幹流であったことから、河流に沿って両側に砂質の自然堤防がよく発達しており、加須・不動岡の市街地は、そうした自然堤防に立地している。また、羽生市には全長78mで、埼玉県下で10番目の大きさの前方後円墳である永明寺古墳(6世紀初頭の築造)があり、御廟塚古墳、稲荷塚古墳、浅間塚古墳とともに村君古墳群(むらきみこふぐん)を形成している。この古墳群も利根川の自然堤防上に形成されており、古代の豪族が利根川の舟運を利用できる地に居住したと推測できる。

会の川締切

文禄3年3月(1594年)忍城主松平忠吉は小笠原三郎左衛門に命じて幹川を締切らせた。これが利根川東遷の第一期工事であるとされていたが、近年の研究では締め切りは忍領の水害対策と新田開発を目的としたものであり、東遷事業のはじまりは27年後の元和7年(1621年)に始まった赤堀川の掘削とされている。あまりに大規模な工事で、『新編武蔵風土記稿』に「水勢はげしかりしに」と記される激流をさえぎる難工事だったため、旅の行者が人身御供として入水したという伝説も残されている。道の駅「はにゅう」構内には「川俣締切跡」の碑が立っているが、これは昭和橋周辺の工事により、上川俣地区の利根川堤防下(埼玉県指定史蹟川俣締切趾)から移築されたものである。なお道の駅「はにゅう」の近くには江戸時代に日光脇往還の関所が設けられており、現在もその石碑が残されている。近くにある新郷の集落には利根川を渡るために待機する宿場町も形成されており、現在も本陣の住宅が残されている。

